

新聞とふれあう学校文化の醸成

～「いつでも・どこでも・だれでもできるNIE実践」の提案～

都城市立有水中学校
教諭 宮本 和典

1 主題設定の理由

平成24年度より実施の学習指導要領のポイントには、以下の四つに集約される。

- ① 基礎的・基本的な知識、技能の習得
- ② 知識、技能の活用による問題解決に必要な思考力・判断力・表現力の育成
- ③ 主体的に学習に取り組む意欲と学習習慣の確立
- ④ 言語活動の充実

NIEが②-④を達成するのに非常に効果的であり、なおかつ、それが①の基礎的・基本的な知識、技能のより確実な習得を促すことはこれまでの全国の実践の成果からも証明されている。私自身も実践を通して、その効果を強く実感している。

しかしながら、NIEは、実際の教育現場において市民権を得ているとは言い難い。これだけ高い教育的効果を持ちながら現場で日常的・継続的な取り組みが見られないのはなぜだろうか。どうして特定の教師の特定の授業だけ、あるいは実践指定校の期間等の特定の期間だけの取組で終わるのだろうか。あらゆる教育活動は、日常的かつ継続的に行うことで効果がみられるということは自明の理であり、NIEにも同じことが言える。NIEの非日常性・非継続性、これこそが、NIEの抱える最大の課題であると私は考える。

また、これまでの実践から「記事が途中で終わっている（改行された文章の行き先が読み取れない）」「○ページ（面）ってどこにあるの？（紙面の分類がわからない）」といったように新聞の読み方がわからない生徒が多数いることも判明した。これは、いわゆる若者の「新聞離れ」ではなく、「新聞知らず」という離れる以前の問

題であるとはいえないだろうか。

繰り返すが、NIEの教育効果は高い。しかし、それはあくまで、学習の主体である生徒や指導・支援を行う教師に日常的に「新聞に慣れ親しむ」態度や「新聞を読む」スキルが身につけていることが大前提である。これまでの自分の取組を振り返ると、ともすれば新聞の活用法や新聞を使った授業の在り方だけに傾注し、生徒や教師が日常的かつ継続的に新聞とふれあうための研究・実践はなおざりになっていた感は否めない。これでは、学習指導要領の改訂により、ほとんどの教科で新聞を活用した学習活動が盛り込まれるようになったとはいえ、期待されるような効果は望むべくもないであろう。

ここまで、本校のみならずほとんどの学校にあてはまると思われるNIE実践上の課題を述べてきた。一つは、これまでのNIE実践が一過性のものになりがちであるということ。もう一つは、生徒に新聞を読むスキルが不足しているということ。以上の課題を踏まえて、本年度は来るべき新学習指導要領下での新聞を活用した学習がより効果的なものになるよう、その土台づくりに主眼を置き、本主題を設定し、研究と実践を行った。

2 研究・実践の内容

本稿では、前項で述べた考えから「いつでも・どこでも・だれでもできるNIE実践」をモットーに取り組んだ実践例を報告する。そのコンセプトは、「内容の精選」と「全校生徒と全教師で行うこと」である。学校はとにかく時間に追われている。教師はもちろん生徒も同様である。NIEを取り入れることで、両者にとって物理的・精神的な負担感が強くなれば、その取組は一過性のもので終わるであろう。そこで、

誰でも取り組めるようなシンプル内容でありながらも効果的な取組を展開すれば、全生徒・教師による日常的かつ継続的な取組が可能になるのではないかと考えた。

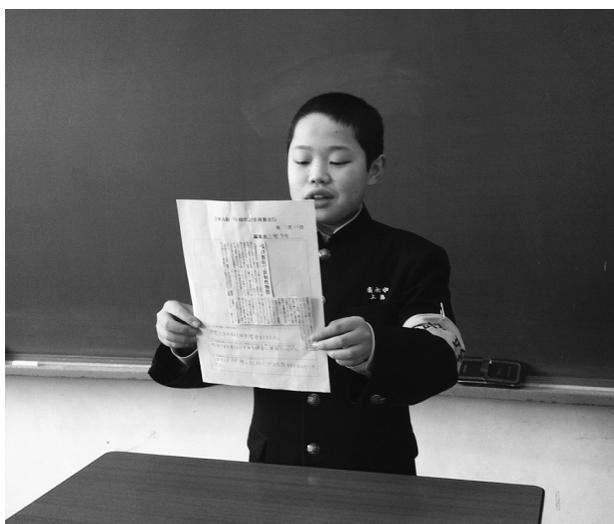
3 研究・実践の実際

(1) 朝の会における新聞活用スピーチについて
 本校では、昨年度の朝の会から、新聞記事を活用したスピーチ活動を行っている。本年度も内容を改善して実施した。スピーチ内容とそれにより高めようとする能力は以下のとおりである。

- ① 記事の要約…内容を読み取り、まとめる力
- ② 記事を選んだ理由…考えをまとめる力
- ③ 記事を読んで分かったこと・疑問に思ったこと・感じたこと…クリティカルシンキング（健全な批判精神を持った、客観的な思考力）
- ④ みんなに訴えたいこと…考えを訴える力

スピーチまでの流れは、担当の生徒が前日に原稿を作成し、表現や視点について担当学年の教師からアドバイスを受け、翌日の朝の会で発表するという形にした。

さらに、発表を終えた原稿を職員室前の掲示板と各学級に掲示し、生徒の活動状況を全校に



【朝の会でのスピーチの様子】

発信するようにした。以下に生徒のスピーチの内容を紹介する。

2年A組 『8時だよ!全員集合!!』

22年 7月13日

編集長 平仁田美帆



【発表原稿】

記事の要約
この記事の内容は、ハイチ大地震から半年たった今も仮設住宅の建設や国際社会による支援の遅れから150万人がテント生活をしていて、新たな住宅を建設するには国連はあと数年かかるとしているそうです。
記事を選んだ理由
22万人以上の死者を出したハイチ大地震から半年が過ぎた現在の様子を知ってもらいたいからです。
分かったこと・疑問に思ったこと・感じたこと
同じ地球で暮らす仲間なのに、国によって対応の違いがあることに驚きました。1日でも早く全員が元の生活に戻れるといいなあと思いました。
みんなに訴えたいこと
他国では大地震が起り、困っている人がたくさんいます。他人事と思わずにいつどこで起こるか分からない地震に備えて今できることをしていきましょう。

【発表原稿詳細】

(2) 職員による注目記事の紹介について

本年度の新たな取組として、教師も生徒と同様に注目記事の発表を掲示方式で行った。教師が記事を発表するのには、次のようなねらいがある。

- ① 生徒発表のモデリング的位置づけ
- ② 多様な情報と視点の提供
- ③ 教師のNIEに対する関心を高める

1週間ごとに輪番で全教師による発表を行った。



【教師作成の「今週の注目記事」】

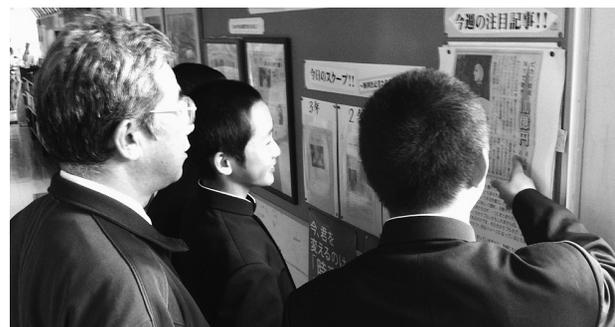
(3) 掲示の工夫について

学校全体で取り組むNIEということで、生徒が作成した発表原稿を朝の会の発表後に各学年とも職員室前に掲示した。これには次のようなねらいがある。

- ① 多様な情報と視点の提供
- ② 良い発表（特に上級生）に触れることによる相乗効果
- ③ 記事の内容に基づいた生徒同士、生徒と教師のコミュニケーション
- ④ すべての教師による包括的な指導体制の構築



【NIE掲示版：各学年の原稿と教師の原稿】



【共に記事に見入る生徒と教師】

4 研究・実践の成果と課題

一過性ではなく、日常的に新聞に触れる機会がある学校、「新聞とふれあう学校文化の醸成」のために、1年間の研究と実践を行ってきた。それは、学習指導要領で身につけることを求められている力や態度を培うための土台づくり、と換言することもできる。故に今回は、読解力や表現力がどれほど高まったかという点ではなく、生徒や教師の意識にどのような変容が見られたかという点で検証を行うこととする。その根拠として生徒と教師の両者に実施したアンケートの結果を活用した。

(1) 生徒アンケート結果

Q：発表活動を通してどのような力が身につきましたか？（選択形式…回答の多い上位3つの力）

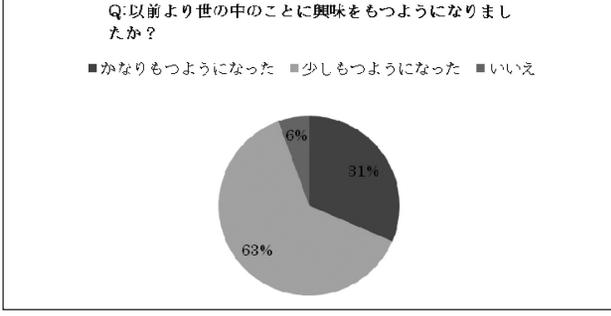
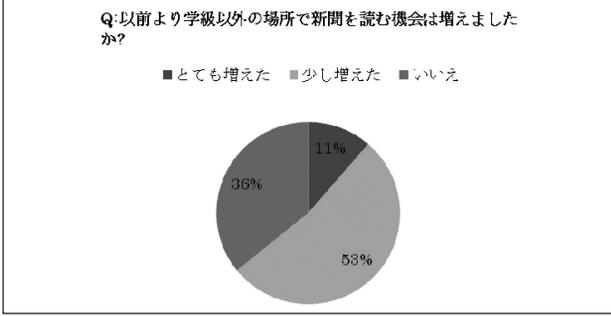
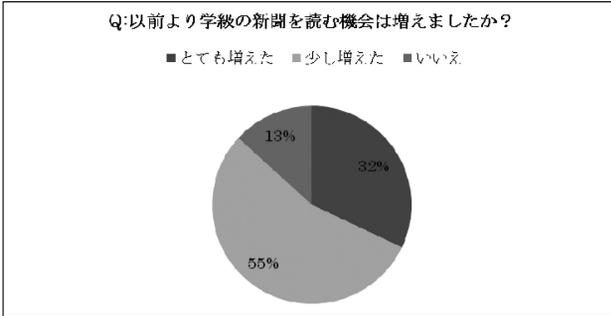
- 1年…①新聞を読む力
②自分の気持ちをまとめ、伝える力
③内容をまとめる力・発表を聴く力
- 2年…①新聞を読む力
②内容をまとめる力
③自分の気持ちをまとめ、伝える力
- 3年…①内容をまとめる力
②自分の気持ちをまとめ、伝える力
③新聞を読む力・情報を集める力

Q：先生の記事や他学年の記事を見ての感想は？

- ・新聞づくりでどのようにすればいいか参考になった。
- ・先生方の考えがわかり、先生との距離が縮まったような気がした。
- ・視野が広がった。
- ・同じ記事を選んだ1年生に対して、2・3年生の記事は、たくさんのかたちを書いていてすごいと思った。
- ・同じ記事を選んでいても、考えることが違うのが面白かった。
- ・もう少し具体的に書くといいなあという記事がありました

Q：今後の活動についての意見は？

- ・今後も続けてほしい。
- ・全校での発表会はどうか。
- ・3年間を系統的に考えて発表のさせ方や質問をさせるなどの工夫をしてはどうか。
- ・自分から必要な情報を拾い出す能動的訓練になりますね。
- ・他の学習面への波及効果が大きいと思います。
- ・趣味の分野に偏りがちになる。様々な分野の記事を読んでほしい。



(2) 教師アンケート結果

Q：注目記事を作成しての感想は？

- ・子どもに何を伝えたいかという視点で新聞を見るようになりました。
- ・自分自身が新聞記事に目を通すようになりました。
- ・人に伝えるという視点で記事を探すと相手はどう考えるかという相手を想う気持ちにつながると感じます。

(3) 検証

各取組を通して、生徒達は、新聞に慣れ親しむ態度や新聞を読むスキル、新聞の内容や自分の考えをまとめる力は身につけていると感じているようである。一方で批評する力(クリティカルシンキング)の高まりは、感じられなかったようである。記事の受け売りにならず、自分なりの考えを確立するための支援(質問をしたり、質問に回答するなどの場面の設定)が必要である。

新聞を読む機会が増え、意識が世の中に向くようになってきている。学級以外で新聞を読む機会があるかとの問いに対し、数字が少し落ちるといった結果から、家庭との連携等の必要性があることがわかった。同時に学校における取組の重要性を再認識させられた。

教師側からは、これからもぜひ継続したいという声と共に、前述した課題を克服するためのアイデアが出されるなど、意識の高まりがみられる。

今後は、これらの成果を土台に、意識だけではなく、実際に読解力や表現力を高めるための授業の在り方等についての研究と実践を行うことが重要である。そうすることで、授業で学んだことがこれら授業外の取組で強化されるという好循環が生まれ、相乗効果が期待できるであろう。